

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 45

学校名・団体名	岐阜大学教育学部附属中学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	グローバル社会を主体的に生きる生徒の育成
<p>〈活動・研究の意義および活動報告〉</p> <p>1. 実施計画に至るまでの経緯</p> <p>各研究機関によって、今後の社会はグローバル化がより一層進む時代であることと位置付けられており、次期学習指導要領の中学校社会科解説においても、目標の中にグローバル化への対応が明確に示されている。</p> <p>このように、社会科の学習においてもグローバル化への対応が叫ばれている中で、申請者は昨年度までに日本の国際貢献のあり方を検討する授業の実践に携わった。この時の実践においては、国際問題を取り上げてはいるものの、日本に暮らす生徒同士の対話であったが故に、グローバルな価値を踏まえて考察できていないという課題が残った。また、この実践と並行して、英国の学校訪問、米国や韓国での学会参加を行ってきたが、諸外国では、様々な方法で生徒らの持つ多様な価値をもとにした対話が行われていることがわかった。さらに、勤務校において、英国リーズや英国ハワイ州の中等学校とインターネットを介した対話活動を行ったところ、社会問題について対話を行うことを通して、社会に対して自己のもつ価値を明らかにしたり、他者の価値を踏まえて深化させたりする点に課題があることを実感した。</p> <p>以上のことから、リアルなグローバル社会の中で社会問題について対話する活動を通して、グローバル化社会を主体的に生きる生徒を育成するために、本実践を試みた。</p> <p>2. 活動内容</p> <p>(1) 対象者 中学校第3学年</p> <p>(2) 教科 社会科（公民的分野）</p> <p>(3) 目的</p> <p>中学校社会科において、価値判断を伴う対話活動を通して、グローバル化が進む社会で、社会の形成に主体的に参画するために必要な資質能力を育成することである。現在の社会科はいわゆる暗記科目と捉えられている現状があるが、生徒らが現代及び未来の社会を生き抜いていくためには、生徒自身が社会に対する問題意識をもち、自らの価値観に基づいて思考し、判断することが重要である。また、学びが教室内にとどまらず実社会との繋がりをもちることが必要であると考えている。</p> <p>(4) 活動の特色</p> <p>社会科の学習にp4cのメソッドを取り入れることと、海外の学生とのインターネットを通じた対話活動を通して、グローバルな視点で価値を形成していくことの二点がこの実践の特色である。</p> <p>第一に、社会科の授業に子どものための哲学（philosophy for children(p4c)）のメソッドを取り入れることで、従来の知識重視のスタイルから、生徒らが問題意識をもつ社会的事象について、生徒らの価値に基づく対話を行うことによって、思考を深めるスタイルへと転換し、グローバル社会において社会の形成に主体的に参加で</p>	

きる徒の育成を目指す。p4cは、すでに道徳などの分野では実践がされており、生徒自身が問題意識をもったことに対して自ら問いを立て、他者と対話することで思考を深めていくものである。これまでの社会科授業は、主に資料に基づく解釈についての対話が多かったが、p4cを取り入れることで生徒自身のもつ価値によって対話が展開されていく。そこで深まった思考は、新たな価値観として生徒のものとなり、社会の形成に向けて主体的に考え、判断し、行動することにつながっていく。

第二に、社会問題に対してグローバルな価値を踏まえて思考したり判断したりできるように、海外の学生と対話をする機会を設定することである。これまでの対話活動は、学級内で行うことが多く、多様な価値を踏まえて思考したり判断したりすることには弱さが見られた。しかし、インターネット回線を用いて、外国の同年代の学生と議論をすることで、グローバルな視点で社会問題を捉えることができるようになる。

以上の二点を特色と捉え、次のように実践を進めた。

(5) 活動時期および内容

①社会科におけるp4cの実施(通年、授業公開6月、7月)

公民的分野の各単元の終末授業において、p4cを取り入れた実践(通年)を行った。公民的分野の「個人の尊重と日本国憲法」「現代の民主政治と社会」「私たちの暮らしと経済」「地球社会と私たち」の単元の終末で、学習したことを踏まえて、生徒自身が問いを立て、仲間との対話によって探究を進める学習活動を行った。実践の一端を、岐阜大学教育学部附属中学校中間研究会(7月16日)や、同校で開催されたp4c in Gifu summer FESTIVAL(7月21日)にて、岐阜県内外の教員、国内外の教育研究者に公開した。

p4cの授業公開



②海外の学生との対話活動の実施(10月、11月)

本校の学生と岐阜県立岐阜高校の学生が共同で、英国リーズのBatley Girls High Schoolとインターネットを介して対話活動(10月17日)を行った。対話のテーマは日英双方の生徒から出されたものを集約し、「消費主義の拡大をどう考えるのか」というものになった。同年代の学生同士の対話ではあるが、生まれ育った環境や国民性の違いからくると思われる価値観の相違を実感しつつ、対話によって新たな価値を生み出すことができていた。中学校の授業でp4cを定期的実践していたために、生徒らは、自分の考えにある価値や相手の主張に含まれる価値を明らかにしながら、深めていくことができていた。計画の段階では一度の実施を考えていたが、日英双方の生徒からもっと対話を続けたいという声が聞かれ、二度目(11月7日)を実施することになった。

英国の学生との対話



③英国における実態調査及び対話活動の打ち合わせ(11月、12月、2月)

英国を訪問(11月26日~12月3日)し、対話活動を行ったリーズのBatley Girls High Schoolで、授業の観察及び教員へのヒアリングを通じた英国における社会科授業の実態調査、社会科教育学研究者の田中伸准教授(岐阜大学、リーズベケット大学)、シティズンシップ教育研究者のミハリスカコス教授との会議を通して、今後の方向性の検討を行った。参観した授業では、歴史を一つの事実として理解するのではなく、生徒らが歴史的事象を批判的に検討し、自らが歴史を解釈していくという授業が展開されていた。事実を無批判に受け入れるのではなく、自身と関連付けて、その重要性を捉えることで、歴史を主体的に捉えることになり、市民性の育成につながると感じ取れた。これを参考に、日本に戻り、歴史的分野と公民的分野を資質能力ベースでつなぐ授業を構想し、中学3年生を対象に「歴史とは何か。」「歴史にはどう関わればよいのか。」という問いを立ててp4cを実践(2月1日)した。

英国の訪問先にて



3. 生徒たちへの効果

本実践のテーマである「グローバル社会を主体的に生きる」ためには、「国際的な視野に立って多様な価値を踏まえた上で社会的事象に対して考えること」と、「批判的思考力を働かせて、社会的事象に対して一旦立ち止まって、考え直すこと」が必要であると考えた。本実践を通して、前者については、海外の学生との対話によって、後者については、p4cの実践によって育成ができる可能性を感じることができた。今後、さらにこの2つのことを関連付けて実践を重ねることで、テーマに迫る社会科授業を構築したい。本実践の実現するにあたって、助成をいただいたちゅうでん教育振興財団様には、心より感謝を申しあげたい。